

令和4年度 第3回地域福祉活動計画策定・推進評価委員会 会議録

日時：令和5年2月16日（木）18：30～20：30

会場：練馬区立区民・産業プラザ Coconeri3階 ホール(西・中央)

## 1. 事務局から

## 2. 配布資料確認

練馬区より 練馬区地域福祉計画より抜粋

- ・資料1 第5次地域福祉活動計画 推進評価チームの取り組み
- ・資料2 令和4年度第2回地域福祉活動計画策定・推進評価委員会  
グループディスカッション「第6次地域福祉活動計画策定に向けて」キーワード

## 3. 練馬区地域福祉計画進捗状況報告

委員：主に今後の動きについて報告する。計画期間は社協の地域福祉活動計画同様、令和6年度までの5年間となる。スケジュールについて、令和5年度は基礎資料とするための区民対象のニーズ調査、地域活動団体向けのアンケートを実施し、調査結果から現状と課題を分析する。区の他の計画との整合性を図りながら計画に盛り込むべき施策等を地域福祉計画推進委員会にて検討する。

令和6年度には地域福祉計画推進委員会の意見をもとに計画素案を策定し、パブリックコメントで、区民からの意見を受け、令和7年3月に集約し、福祉のまちづくり推進計画と成年後見制度利用促進計画を含んだ形で策定する。次期計画ではこれに加え、重層的支援体制整備事業実施計画、再犯防止推進計画も含めて策定していきたい。

重層的支援体制整備事業については来年度から社協の地域福祉コーディネーターと関係機関の連携の強化、社会参加に向けた居場所支援の取組みを強化していきたい。

再犯防止推進計画は、刑法犯のうち再犯者が増えてきており、地方公共団体に対して再犯防止のための計画策定が求められている。刑務所出所者等への出所後についての計画、主に住むところになると思うが、政策をまとめたい。これらは地域福祉計画の目的でもある、誰もが住み慣れた地域で安心して生活できる地域づくりに合致する。社協の計画と方向性を合わせながら計画策定に向けて検討していきたい。

## 4. 第5次地域福祉活動計画の取り組み状況について【資料1】

職員：※資料1参照（下記は、資料にはなく、口頭で伝えた部分のみ記載）

### ・ネリーズ通信

現在3回発行しており、次回3月発行。

### ・ネリーズ懇談会

光が丘のわれもこうで開催。強風の日であったため、当日欠席が2名あった。ネリーズ8名のうち、民生委員（退任者含め）3名の参加があり、委員にもご参加いただいた。あかねの会の取り組み等の話の他、利用者の方からも話をいただいた。

利用者がつくったケーキと飲み物を楽しみながら実施し、和やかな雰囲気であった。委員からは、あかねの会の話以外にも、自身のこれまでの人生の中での出来事、人との出会い、葛藤についても話をいただいた。ネリーズからは「自分の中の弱さや偏見に気づいた」「一人ひとりが生きやすい社会にしていきたい」などの感想が聞かれた。委員の「障害の有無に関わらず一人ひとりにとって生きやすい社

会にしていきたい」という言葉に非常に感動され、涙されていた人もいた。今後、チームとして振り返りを行い、次年度に向けて引き続き取り組んでいきたい。

・ホームページ

第5次計画についてわかりやすくまとめた動画をホームページにアップしている。今日現在5つの動画がアップしている。今後もショート動画などを作成し、身近に感じてもらえるように工夫したい。また、ネリーズ懇談会の様子の動画も作成中で、近日アップ予定。

・キーパーソン事例

※資料参照

・評価

※資料参照

5. 第2回策定・推進評価委員会グループディスカッション等を振り返って【資料2】

委員：資料2をもとに説明

前回のグループディスカッションでは、ネリーズとキーパーソン、語る会、重層的支援体制整備事業など様々な切り口を通じて活発な意見交換が行われた。その中でのキーワードを抽出し、6つのカテゴリーにし、まとめたものが資料2となる。このカテゴリーについて説明する。まずは社協として最も大切にすべき【相談対応】にまとめたもの。社協として断らない相談支援に取り組んでいる一方で、断っていることを自覚することも必要という意見、そして色々な人や地域を巻き込みながら対話していくことの必要性や、相談者の言語化を支援する、支える側支えられる側と一緒に取り組むこと、解決するのは本人という視点などをまとめた。次のカテゴリーは【早期発見・予防】。重層的支援体制整備事業と絡めて、声をあげられない人や相談できない人、地域に埋もれている声を発見するアウトリーチのしくみについてまとめた。それに併せて、例えば子ども食堂などの場を使ったしかけやネリーズ、キーパーソンの力など、埋もれた声をキャッチするためのしくみとして【つながる】というカテゴリーでまとめた。この【早期発見・予防】と【つながる】は関連し合い、重なり合っていることから併せて表現した。

【ネリーズ・キーパーソン・地域福祉コーディネーター】のカテゴリーについては言葉で示すよりも事例などを用いて伝えた方がわかりやすいという意見をまとめた。【現場の思い、ジレンマ】については、外国籍の人への支援など現場で感じる制度の壁や、地域で活動している様々な人々がミッションを抱え、その中でジレンマを感じていることを互いに話し合うことで、少しずつでも変化していけるのではないかという意見があり、それをまとめた。

最後に我々に欠かせない【地域づくりの視点】についてまとめた。住民主体、権利擁護、多様な人が生活している地域を意識しながら、多様な人々がつながる場をつくり、そこでの気づきを活かしてどのように動くか、人間力が求められるという意見があり、土台の位置で示した。

委員：区内で女性のグループを運営している。私たちのグループは生きづらさを抱えている女性が集まっている。いろいろな制約がある中、練馬区で生まれた人はほとんどおらず、大人になってから練馬に来ている。不安を抱えている本人たちがおもいきり話をできる場をつくらうとぶどうの木を立上げた。実際には20~30人ほどいる。暴力でいろいろな経験をしているため、相談にのってもらった経験はしているが、いつも“被害者”“弱者”の状態のまま。自分の経験を人のために使いたいという想いを強くもっていて「何かできることないですか?」と言ってくれる。それぞれが力を持っていて、それを団体がどのように励まして、寄り添って一緒にやっていくかが大切。社協を様々な問題を相談できる場所と知らない人も多い。そのような情報を伝えていくことが私たちの役割だ

とも思うが、社協の人たちが地域の方たちともっとつながってほしい。地域の中でごみの片付けに参加している人もいるが、みんなそこに入っていき怖さを感じている。励ましながらなんとかやっていきたい。本人たちにしかできないことがある。多くの人たちを励ましてきている。“用いてほしい”という思いがある。その人たちが活躍できるようにと思う。制度等の限界はあるが、なるべく本人たちに寄り添ってほしい。

委員： この委員会に出席するようになってかなり年数を重ねているが、先日のグループディスカッションは双方向のやりとりで非常に有意義であった。職員が何を考えているか、話ができる機会が非常に良かった。この形式で今後もやってほしい。私が運営している会は2008年にできた。社協が後押ししてくれた。社協がなかったら今の会は無いし、今の自分はない。普段から関町ボランティアコーナーの職員には助けてもらっている。制度が充実してきて、発達支援事業所や、発達障害児放課後等デイサービスもたくさん数ができている。とは言え、まだまだ必要なお子さんは多い。子どもへの直接支援はもちろんだが、保護者への支援も大事にしている。例えば、子どもの理解ということでは、良いところを見つける手伝いや、困ったことは一緒に考えよう、と行っている。自分の関わっている相談情報ひろばには、発達障害以外の相談も入る。自分は相談に関しては未熟だが、全部受け止めるようにしている。受け入れるかは別として受け止めるようにしている。前回話したのは、ある人が自分の子どもが難病で児童発達の施設を作りたいとの話で会に相談にきた。どんな難病であっても、人は世界中で自分ひとりというのはつらいが、同じような悩みをもっている人に出会うということで勇氣100倍になる。とにかく仲間ができるといいね、と話をした。練馬区でいろいろなところに相談にいったが、合うところがない、どうしたらいいか、との相談だった。まずは社協に行こうと伝えて、社協につないだ。自分ができないところは人を頼る、つなぐ、そのマインドが重要だと思う。相手の話について、初回は自分が話をするのはぐっとこらえて、ひらすら聞く。相手が言語化できるようにしたい。本人に役立ちたい気持ちがあってもそんなに簡単ではないので、その人がどの段階にいるのかを見定める。まだ漠然としていて、話したいのか、目的をもっているのかなど。今まで“こうしたらいい、ああしたらいい”とたくさん言ってきた。それはすべて失敗と感じている。相手の話をきいて“そうだったんだ。大変だったね”と寄り添っていかないとハートに届かない。地域がどのくらい楽しくなるか、気持ちが通じる人がいて、一緒に楽しめることがあるのが地域の醍醐味。地域には楽しい人がたくさんいる。どうやってその人たちを引っ張りだせるかと考えている。先月、相談情報ひろばに夫を呼んで新春お楽しみ会をした。手品、ウクレレ漫談など行った。本人も楽しい、来てくれた人も楽しい。宇宙のことが詳しい人に声をかけたら“やります”と言ってくれた。そういう人たちをつなぐ手伝いはできる。

職員： 委員の話にあった難病の子を持つ親の相談のその後について、委員から話をもらったあと、すぐに本人に会った。発達支援事業所の立上げにむけて色々と情報収集されていた。地元の地域とはつながっていない様子で、まずはそのつながりをつくろうと提案した。本人の住んでいる大泉地域には、委員など思いをもって活動している人がたくさんいる。そこを知って、つながってほしかった。本人の事業所立上げとは直接的な関連はないかもしれないが必要だと思った。社協の一番身近な拠点であるかたくり福祉作業所にも今後見学してほしいと思っている。また、本人は非常に力のある人でファンドレイジングも実施。200万円を超える寄付が集まり、それだけ本人の応援者が広がっている。先日NHKのおはよう日本にも希少難病のテーマで取材を受け、話をされていた。

## 6. グループディスカッション

テーマ：第6次地域福祉活動計画策定にむけて

職員： キーワードで出されている項目のどれかを取り上げ話をしたり、日々の業務や活動で感じていることや課題と思うことなど具体的に出し合いながら、意見交換をしていきたい。各グループ発表のあと、各委員から感想をいただけたらと思う。

#### 【各グループ発表】

##### ・Aグループ

社協の職員が日々感じている難しさ、課題を出した。生活サポートセンターからは窃盗を繰り返す相談者にかかわる中で、これまで気づかなかった社会の障壁、住まい探しひとつをとっても難しかったり、障害福祉サービスを断られてしまったりする。きららでは酉の市をメンバーで作りに上げてきたなど、当事者の力を大切に関わっている一方で、話したいという気持ちの強い人に対して、どのような対応をしたら断らない支援と言えるかなどのお話があった。ほっとでは家族、血縁関係が薄い人などの相談が増える中で、関係者のチームでどう支えるか課題に感じているという話や、白百合では高齢化する中で世帯として地域や親族との関係希薄、孤立している人が多い中で、地域の中でどう支えるかなどについて話があった。委員からは、本来の子ども支援とは違う相談も入る中で、リスク回避と個々の相談を受け止め尊厳を確保することを両立させる難しさ、本来業務に割く時間が少なくなる中でジレンマを抱えることもあるとの話があり、委員からは、犯罪に至る人の「孤立」についてどう考えていくか、受け止める側も、いろいろな人がつながりながら連携して支えることや、社協だけで受け止めるのではなく、地域の力をどう引き寄せて一緒にやるのが大事ではないかとの話があった。委員からは、5次計画の「それぞれの生き方を支えあう」を大切にしながら、地域や社協の拠点、ネリーズ通信などを生かしながら、それぞれの生きていく思いを受け止め、発信することが大事などの意見をもらった。

##### ・Bグループ

地域の課題ということで、委員につながった話にもなった。委員から、「本人に会い、とても魅力的な人だった。その人柄もあり、行動力もあり、つながりをつくることができている」という話があった。その話から、声を出せない、発信できない人が地域にいて、その人たちに何ができるかを話し合った。委員からは、高齢の両親とその子どもの世帯でお金の管理が難しい人からの相談について話があった。本人が通帳紛失され、仏壇にあったようだが、2019年から記帳されていない実態が分かった。包括はつながっているがつながりが弱く、課題に気づくことができなかった。地域には相談機関が複数あるが、気づけないこともある。それを気づけるようにはどうしたらよいのかという話になった。また、白百合で関わっている利用者が誕生日を迎えた。生まれてきてからの経過が連絡帳に母親から書かれており、その中に「いつになったら解放されるのだろうか」ということも書かれていて、いろいろ考えたという話があった。施設は長く見守ることが大切と思っていたが、その弊害があるかもしれないという意見もあった。生活福祉資金の担当からは現金以外のクレジットカード等の利用により、お金の収支バランスが見えにくくなっているという話もあった。

##### ・Cグループ

白百合からは多様性を知るというキーワードを受けて、学校の授業で当事者が話す取組みについての話題になった。小学校の授業で話をしに行くことはよくあるが、その授業を受けた小学生のその後の変化を知れる機会がつけるとよいとの話になり、学区の中学校でもう一度会えたら良いとの案も出た。また、委員からは、自立支援法になって、施設の目的・役割が明確になりすぎて、枠組みにとらわれて活動しにくいという話もあった。また、声のあげられない人へのアプローチは社協に期待をしているという話もあ

った。地域の中で障害者に出会うことも増えた一方で、市民の意識はどこまで変化があったのか疑問を感じているとの声もあった。参加支援というワードから、生きづらさを感じている人が地域に多いが、その存在を知らない人も多く、知ってもらうためにどうしたらよいかという課題も出て、就労体験などの機会を増やせたらよいのではないかという意見が出た。委員からはコロナによって改めて人と情報に接することは欠かせないということを知ったとの話から、町会への加入率の減少や、損得でしか物事をとらえない人が増えたとの話があった。人と関わる体験が、町会ではできる。町会は人を育てるところだとの話もあった。きららは商店会のみなさんに支えられてきた。今ぼつぼつと店を閉じる商店も出てくる中、メンバーから「地域のために何かできないか」という言葉が出てきた。その言葉に職員として非常に力を感じたとの話があった。そのように人々の思いが引き継がれていき力になるのではないかと思う。

#### ・D グループ

当事者の持つ力はやはり人の心を動かすということを話し合った。当事者と出会う場面を社協がどれだけ作れるかという話になった。私たち支援者は、制度の対象者かどうかという捉え方になりがちだが、住民にとってはそうではない。同じ思いの人に出会いつながれると救われる。場をつくる、人をつなげる、知り合うことが大切という話が出た。出会いと出会い“いいな”と“いいな”をつなげるマッチング力が大切という話もあった。一方で、SNSなどでつながりの希薄化、自己開示が苦手な若者もいる中で、人が人をつなぐことが本当に大切。マッチングするためには、相手を知ること、見立て、アセスメントが重要で、障害があるからできないなどの古い見方を変えていくことが重要である。

#### ・E グループ

民生委員の立場から、地域の高齢者の見守りをどうしていくかが課題という話があった。また地域の遊び場の公園で、サッカーがうるさいという声が出ていてルールづくりが必要ということであった。また、DVを受けたことで本人が自信を持ってないとき、支援者がじっくり寄り添うことが大事。PTSDの影響から仕事をすることが難しい人もいて、経済的な支援も必要であるとのことであった。本人が自己表現できる場をどのようにつくるかという話にもなった。かたくり、白百合からは、コロナ前のように活動をどう戻すのか、自宅で過ごしている方がどう復帰するか、そして高齢の親への新たな支援が必要なケースの話にもなった。ボランティアセンターからはひきこもりの子を持つ世帯について、子と親とで思いが違うため、点ではなく、面でかかわる必要があるとの話が出た。きららからは、本人の愚行権をどのように尊重し、見守るかが課題という話があった。生活福祉係からは、断らない支援とあるが、お金を借りることが目的である方に相談支援をどのように継続していくかという課題が出た。

#### <策定委員より一言ずつ感想>

- ・社協の職員は答えがひとつではないことに苦労しているをつくづく感じた。
- ・社協の色々な働きが大分わかるようになった。悩みが自分たちと同じだと感じた。だからこそ、これからも一緒にやっていけたらと思う。
- ・経済的にタイトになり、貧困などの課題がどんどん出てくると思う。社会保障予算も削られると思う。社協の役割がさらに重要になる。解決するという問題ではなく、続いていくこと。これからも努力を惜しまないで頑張ってもらいたい。

- ・町内会の話の中で“地域社会は子どもを育てるゆりかご”という発言を委員がされていて感銘を受けた。一つの方向性を示す言葉だと感じた。制度の谷間に落ちる人がいる。できた制度をどうするか。小さく生んで大きく育てると表現するように、制度ができたら安心ではなく、その先のあり方を考えることが重要。地域の中にある課題をどのように拾っていくか、その役割が社協にあると大いに期待している。
- ・いろいろな話を聞いた。リスク回避と本人の尊厳をどうするかということかと思う。自分たちの場合は、発達障害などの子もくる。例えば「障害がある」という目で見えてしまうことで、その人本来の姿が見えなくなるということもある。「障害がある」という意識をどう外していくかという意味では、「制度がないと守られない」と考えてしまう前に、その人がどういう人柄なのかを見ることが重要。それをみんなで連携して進めていくことが必要。今は管理社会だと思うので、自分たちが息苦しいのであれば、自分たちで変えていく、息のしやすい社会にしていく。そのために立場やいろいろな価値観を共有するこのような場は非常に大切。
- ・今日のディスカッションを受けて、第4次計画の時にディスカッションでネリーズが誕生したことを思い出した。社協が出した地域福祉協力員という案に対して、地域福祉協働推進員がよいのではないかと意見が生まれた。そのようにディスカッションを行いながら進めることが改めて大切だと感じた。
- ・少人数で話し合うことは、自分の考え、悩みを言える話しやすさがある。人が多いほどこの人の仕事、自分の仕事、となりがち。みんなでより良くしていくことが重要。ディスカッションは重要。ワンオーワンで仕事の話は絶対しないというルールで個人のことを話すというのもよい。やるのは「人」。その人のことを知ること、一緒にやる仲間を知ること、それがとても重要である。つながりが太くなる。そのことを継続していけたらよい。少子高齢化の話もあったが、自分たちの世代がどうなるかみんなで考えていきたい。
- ・今日も楽しい時間を過ごすことができた。毎日、子どもにとって大事なことは何か考えて暮らしている。ここに来ると地域にとって大事なことは何か考える機会になる。キーワード資料すばらしいと思う。話しやすい。ばらばらになりそうな話でも、キーワードにより沿って話すともまとまっていく。
- ・今日も改めて対話の力を感じられた。マスクをして、コロナは収束しているとは言い難いが、策定・推進評価委員会のディスカッションに参加すると、きちんと地域に根差した話を聞くことができ、グローバルな視点での気づきもある。私たちは社会福祉の仕事を通じて、見えにくい、聞こえにくい声にどう迫っていくかだと思う。日常はひとつひとつどこかでつながっていて、いろんな人に支えられている。計画をつくり、実行するのは大切だが、最も大切なのは人とどう想いを分かち合うかであると改めて感じるディスカッションだった。

## 7. まとめ

副委員長：白百合の利用者の母が話された「いつ解放されるのか」というフレーズを聞いて、親の立場や、声を出していない立場の人たちとか、色々な立場を超えて、障害のあるなしということを超えて、誰もが自分が存在している価値を確立したい思いを持っていて、それが満たされないと幸せになれない。お母さんの気持ちを考えると切ない。委員から話のあったお父さんは、何が原因かわからずずっと苦しんでいたが、そのことを活かして誰かの役に立ちたいと思っている。そこに魅力を感じた。委員の話の時も「用いられたい」という話もあって、一人ひとりを活かす形をどう創っていくか、生み出していけるかを改めて考えることができた。

委員長：社協の各部門がジレンマを抱えている話がたくさん出た。断らないということを看板にしてはいるが、実際、一生懸命になればなるほど、本来業務からはみ出していってしまう。それでも制度の隙間におちてしまう。孤立した人がどうしても出てしまう。本来は仕事ではないところまで関わらないと救いきれないという事例がたくさんあった。社協で全面的に抱えるのは無理。地域のどこかが支える。支えてくれるところが全くないわけではない。そういった団体もある。社協の抱えていることをもっと地域に出してほしい。社協の仕事を知らない人もいる。自分たちがやっている仕事を地域に出していくことで、協力者をつくっていくことを目指していきたい。

## 8. その他

- ・費用弁償について

- ・次回日程

令和5年7月6日（木） 18時30分から ココネリホール

以 上